

# KOΣMOΣ

コスモス No. 88 1989 冬

特集

## ぐるぐる辞書

あな  
たの  
知  
ら  
な  
い  
世  
界  
へ



# 特集

# めくるめく辞書

——あなたの知らない世界へ——

## 事典と索引

常 盤 繁

図書館の参考図書室には沢山の事典が並んでいる。中でも百科事典が最も代表的であろうが、その他にも文学事典や歴史事典、人名事典、地名事典など様々の専門分野の事典があり、調べものの際に欠かせない存在である。ただ、この便利な事典類もやみくもに本体だけを調べるのではなく、案外見落としがちな巻末（別冊）索引や特別に作られた索引類と組合わせて使うと、情報の探索を効率よく行えることが多い。

まず注意しなければならないのは巻末（別冊）索引である。事典の本体の見出しにはあらゆる言葉が出てくるわけではないし、他の見出しの下で解説の中にしか出てこない言葉もある。思いついた見出しで探して出てこなかったら、索引を使わなければならない。例としてはやや特殊かもしれないが、ピカソの「アヴィニョンの娘たち」という作品の図版を見たいとする。代表作の一つだから百科事典に載っているだろうと、ある百科事典の「アヴィニョンの娘たち」や「ピカソ」の項目を調べてみたが出てこない。そこで、索引でこれらの言葉を探してみると、どちらからでも「キュビズム」の項の別刷カラー図版の中にこの絵のあることがわかる（ただし、「アビニョン」という見出しは索引にない。こういう場合は凡例で、その事典が採用している表記法を確認する）。

知っていると便利なのは、難読（字画）索引である。数か月前、図書館の入口掲示板に国立劇場の文楽のポスターが貼ってあったが、それに「双蝶曲輪日記」という演目がのっている。しかし、かながふってないので何と読んだものか見当がつかない。こうした難読語は、作品名の他にも書名、人名、地名、古美術関係の用語などに特に多

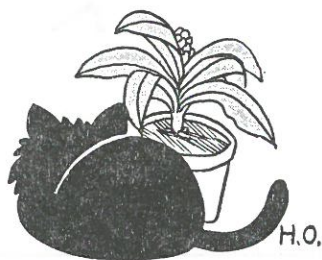
く、大きな漢和辞典を引いてもいっこうに出てこないことがしばしばである。このため、人名、地名については『人名よみかた辞典』『現代日本地名よみかた大辞典』（共に日外アソシエーツ）といった独立した索引も作られているが、それ以外では辞典巻末の索引が役に立つ。例えば、「演劇百科大事典』『世界名著大事典』（共に平凡社）、『日本古典文学大辞典』（岩波書店）、『新潮世界美術辞典』（新潮社）などには詳細な難読索引がついていて便利である。

人名辞典を使う時は、事前に『人物レファレンス事典』（日外アソシエーツ）を引いておくが無駄が少ないであろう。これは、多数の人名事典の索引で、どの人物がどの事典に載っているかがわかる他、生没年、職業などのデータと肖像の有無、記述量などが示されている。

ところで、事典類は情報をコンパクトに圧縮して収載したものであるから、その記述だけでは不十分なこともある。そうした時は、記述中に参考文献が紹介されていれば、探す手間が大いに省けることになる。残念ながら、わが国の事典はこの点、かなり弱体であるといってよい。ただし、伝記類については『日本人物文献目録』（平凡社）や『人物文献索引』（国会図書館）のような目録があるので、探すのが容易である。

なお、こうした情報探索技術を身につけたい人は、長澤雅男著『情報と文献の探索』（丸善）などで勉強するとよい。

（社会学部助教授 ときわ・しげる）





## 俗信辞典

——外国の習慣を知るために——

長 野 晃 子

どこの国にも、国語辞典を始めとして実に多種多様な辞書がある。どの辞書も、我々を我々の知らない世界に導いてくれる。我々の知らない世界というのも簡単に定義出来ない言葉であるが、今、仮に、空間的に未知の世界と、時間的に未知の世界とに分けてみよう。空間的に未知の世界：外国を知るために、我々はまず英↔和辞典、仏↔和辞典等を手にして、知らんとする国の言葉を勉強する。一応の会話力を習得して、実際に外国人と一緒に仕事をしたり、外国で暮らしたり、日本を案内したりし始めると、外国人と日本人との習慣の異同、礼儀作法の異同が大きな問題になって来る。つまり、それぞれの国の時間的に未知の世界：過去・伝統が問題になって来るのである。日本に来る外国人の多くが、旅館や家庭のお風呂の水を自分が使用後ただちに抜いてしまっ<sup>みそぎ</sup>て困ることがよくある。逆に、他人が浸った後の湯に入ることを拒んで、どんなに寒い晩でも、さっとシャワーを浴びるだけで我慢する外国人も多い。何故ならば、フランス、ドイツ等を始め多くの国々で入浴は裸の遺風である。そして入浴が裸であったことにこだわっている国の人々は、他人が裸をしたあとの汚れた湯に入るなんてもっての他だし、他人と共に1つの湯槽に入ることもしない。家族であってもである。入浴の仕方が原因でヨーロッパ人お断りという日本の旅館も多い。どの国も、どの民族も、それぞれの習慣、作法を持っており、それらはそれぞれの国の民間信仰や俗信と深く関わりあっている。ある外国語を学んだら、その国語を話す人々の俗信も学んでみよう。それは我々の知らない世界の懐を開いてくれる。フランス語を学んでいる学生諸氏には、Dictionnaire des Superstitions（：俗信辞典、Tchou 社、1980 年刊）の一読をお勧めしたい。中級、上級コースの力と辞典があれば十分に読めると思う。日常よく使う単語や言い廻しを覚えるために最も適である。

（文学部教授 ながの・あきこ）

## 読み方が書いてない！

田 島 正 弘

「おまえの辞書にはカタカナで読み方が書いてあるのに、おれのは書いてない。単語の綴りに似ているようで似ていないのが、単語の隣の括弧の中にあるだけだ。c の裏返しに e の逆さま、f の横棒なしが変にくねっているかと思えば、a と e がくっついている。こりゃ何だ！」

友人が持っていた入門者用の英和辞典と、自分の辞書を見比べたときのことだった。中学一年の時の思い出であると同時に、辞書についての最初の思い出でもある。学生時代には最初か二番目に出ている意味を見るのがせいぜいだった。ところが自分の専門分野内に限っての事だが、英文を書かざるを得なくなってから（著作権侵害にならない範囲での英借文かな？）、辞書を見るのではなく読むようになった。馬鹿の一つ覚えのように、専門分野で用いられる訳語しか思い浮かばなかった単語の別の意味（こちらがごく普通の意味だと思うが）や用法を知り、一つ利口になったと思ったり、こういうときは英語でどう言うのかと、辞書を引いてもびったりする表現がなく、「英語って日本語とずいぶん違うんだなあ」と変に感心したり、結構楽しい。「辞書は見るんじゃなくて、読め」とどこかで言われた記憶がある。この頃になってそれが多少なりともできるようになったようだ。英語を勉強する上で、新たに励みとなるものを得たような気がする。授業で訳をやらされるから、試験があるから、ということで辞書を引くことの多かった学生時代では考えられないことである。私が学生の頃と今ではだいぶ状況は違っているが、私と同様に英語が苦手の学生さんにとって、案外「辞書を引く」状況は変わっていないのではなからうか。もし今のような体験を学生時代にすることができていたら、英語でこんなに苦労しなくて済んだのではないかと思う。

「目くるめく英和辞典」との出会いから始まった英語との付き合い、止めたくても止められない。

（工学部教養課程講師 たじま・まさひろ）

## いまを知る

- 現代用語の基礎知識 自由国民社 (年刊)  
(白, 朝, 工)  
imidas 集英社 (年刊) (白, 朝, 工)  
現代人のための情報源大百科 糸川英夫編  
講談社 1983 (白)  
朝日年鑑 朝日新聞社 (年刊) (白, 朝, 工)  
時事年鑑 時事通信社 (年刊) (白, 朝, 工)

## からだに自信ありますか

- ヒューマンライフ・エンサイクロペディア  
ジョセフ・ハンドラー 講談社 1972  
(工)  
カラー図説医学大事典 朝倉書店 1985 (工)  
精神医学事典 加藤正明〔等〕編 弘文堂 1978  
(白, 工)  
エスカ 食品・栄養・健康用語辞典 栄養学・食  
品学・健康教育研究会編 同文書院 1987  
(工)  
大図説 スポーツ百科 小学館 昭和52  
(白, 工)  
スポーツ科学事典 ペーター・レーティッヒ  
プレス・ギムナスチカ 1981 (白)

## シーズン到来バードウォッチング

- 鳥類学名辞典 内田清一郎, 島崎三郎共著 東京  
大学出版会 1987 (工)  
世界鳥類和名辞典 山階芳麿著 大学書林 1986  
(工)  
日本産鳥類図鑑 高野伸二著 東海大学出版会  
1982 (工)  
日本鳥類大図鑑 清棲幸保, 清棲保之共著  
講談社 1981 (白, 工)  
野鳥の事典 清棲幸保著 東京堂 1981  
(白, 工)

## 女性の時代

- 世界女性史小事典 原ひろ子ほか編 エッソ石油  
広報部 1986 (白)  
大日本女性人名辞書〔増補〕 高群逸枝 新人物  
往来社 昭和55 (白, 朝)

## 編集委員がおすすめる

# 辞書で

## 摩訶不思議

- 世界神秘学事典 荒俣宏編 平河出版社 1981  
(白)  
図説 占星術事典 ウド・ベッカー編  
同学社 1986 (白)  
夢事典 ハンス・クルト編 自由都市社 昭和55  
(白)  
心理学事典 平凡社 1981 (白, 朝, 工)

## 人間大好き

- ギネスブック 世界記録事典 講談社 (年刊)  
(白, 工)  
賞と記録の人名事典 自由国民社 1973  
(白)  
海を越えた日本人名事典 富田仁編 日外アソシ  
エーツ 1985 (白)  
来日西洋人名事典 武内博 日外アソシエーツ  
1983 (白)

## 笑えるぜ

- 落語事典 東京大学落語会編 青蛙房 昭和44  
(白)  
江戸小咄辞典 武藤禎夫編 東京堂出版 昭和40  
(白)  
上方演芸辞典 前田勇編 東京堂出版 昭和41  
(白)  
世界なぞなぞ大辞典 柴田武ほか編 大修館  
1984 (白)  
英語なぞ遊び小辞典 郡司利男編 開拓社 1983  
(白)  
ことば遊び辞典 鈴木棠三編 東京堂出版  
昭和41 (白)

# 遊 ぼ う

## 街を知る，東京を知る，江戸を知る

- 江戸東京学事典 小木新造ほか編 三省堂 1987  
(白，工)
- 江戸学事典 西山松之助ほか編 弘文堂 昭和59  
(白)
- 江戸東京八十景小事典 芳賀徹ほか編 エッソ石  
油広報部 1987 (白)
- 江戸生活事典 三田村鳶魚 青蛙房 昭和38  
(白)
- 江戸文学地名辞典 浜田義一郎ほか 東京堂  
昭和48 (白)

## 埼玉だってえらい

- 埼玉大百科事典 全5冊 埼玉新聞社  
昭和49—50 (白，朝，工)
- 埼玉史料辞典 磯田文雄編 埼玉新聞社  
昭和43 (白，工)
- 埼玉年鑑 埼玉新聞社 (年刊) (朝，工)
- ガイドブック さいたま 埼玉県民部広報課編  
(年刊) 県政情報資料室 (朝)

## 工学部学生必見—ハイテク材料

- 機能材料辞典 北田正弘 共立出版 1984  
(工)
- 新しい材料の事典 日本材料科学会編 共立出版  
1980 (工)
- 先端材料事典 日本材料科学会編 裳華房 1987  
(工)
- 材料大事典 産業調査会 1985 (工)
- 先端素材事典 青柳全 新技術開発センター  
1986 (工)

## 趣味の世界

- 切手の百科事典 旭アド 昭和50 (白)

- 日本人形玩具辞典 斎藤良輔編 東京堂 昭和43  
(白)

- 手芸百科事典 パメラ・クラバーン 雄鶏社  
昭和53 (白)

## グルメなわたし

- 日本名菓辞典 守安正著 東京堂 1971  
(白，工)
- 世界の酒事典 稲保幸著 柴田書店 1972  
(白)
- ラルースワイン辞典 G. ドゥビュイニユ著  
三洋出版貿易 1973 (白)
- ラルース料理百科事典 P. モンタニユ著  
三洋出版 1981 (白)
- コーヒー小辞典 伊藤博著 柴田書店 昭和55  
(白)
- 味覚辞典；日本料理 奥山益朗編 東京堂  
昭和47 (白)
- 蕎麦辞典 植原路郎著 東京堂 昭和48 (白)

## 探偵物語

- 探偵小説百科 九鬼紫郎著 金園社 昭和50  
(白)
- 日本推理小説辞典 中島馨編 東京堂 昭和60  
(白)
- シャーロック・ホームズ事典 J. トレイシー著  
パシフィカ 1980 (白)
- 明治・大正・昭和 事件・犯罪大事典 東京法経  
学院出版 1986 (白)
- 「架空の人物」人名辞典 日本実業出版社  
昭和57 (白)
- 犯罪学辞典 成文堂 昭和57 (白)

## おわりに

- 悪魔の辞典 A. ピアス 創土社 昭和47  
(白)

( ) 内の白，朝，工は所蔵館，白山，朝霞，工学部をあらわします。ここに取り上げたもの以外にもまだまだ数多くの辞書，事典があります。(なお，一部，事典の範疇に入らない図書も含まれております。)



## 貴重書から

ピエール・デメゾ編・刊行

『ジョン・ロック氏

未刊小論集』初版(1720)

平野 耿

「理性の時代」、「(魔術と科学の) 両棲類的時代」、「科学革命の時代」、これらはみな17世紀を端的に表示するキーワードである。別のひとつに、イギリスの数学者で哲学者ホワイトヘッドが命名した「天才の世紀」という呼称がある。彼は『科学と近代世界』(1925)の第3章で、この世紀を代表する12人の天才たちの名を挙げて、今日に至る西欧の知的生活と諸科学の発展は、彼らから供与された諸観念の蓄積に基づいて実現されたと述べている。彼が選んだ顔ぶれは、フランシス・ベーコン、ハーヴェイ、ケプラー、ガリレオ、デカルト、パスカル、ホイヘンス、ボイル、ニュートン、ロック、スピノザ、ライプニッツで、今回とりあげるロック(John Locke, 1632-1704)もそのひとりである。

1704年10月28日、彼が72年に及ぶ波瀾に富んだ生涯を了えた時、時代はすでに「啓蒙の世紀」に入っていた。当時彼の名声は、イングランドやスコットランドだけでなく、オランダやフランスにも聞えていた。四度にわたる大陸滞在、特に1683年から5年半に及ぶオランダ亡命の間、多数の知識人を知己に得たことが素地となっていたが、彼の名を直接高めたのは、名誉革命後次々に出版された著作の評判による。『寛容についての書簡』(Epistola de Tolerantia, 1689。ポプルの英訳は90年刊)は、信教の自由と政教分離の原理を主張した警醒の書であったし、90年に出た『人間知性論』(An Essay concerning Human Understanding)と『政府論』(Two Treatises of Government)は、近代認識論と民主主義政治思想の原点・柱石となった不朽の名著である。

他の天才たちと同様に、ロックの関心と論究も多方面にわたった。93年には『教育に関する若干の考察』(Some Thoughts concerning Education)で、医師としての知見を披瀝しながら、徳育を重視した紳士養成教育論を展開したかと思うと、95年には近代聖書批評学の先駆ともいわれる『キリスト教の合理性』(The Reasonableness of Christianity)を出版する。また92年と95年には『利子論』、『貨幣論』(原題省略)を再度にわたって執筆し、政府の経済政策に一石を投ずるなど、彼の活躍は八面六臂の形容にふさわしい。それだけに、著作に対する反論も賑やかであった。ロックは果敢に応戦した。オックスフォードの聖職者プロースト(Jonas Proast, 生没年不詳)からの再三再四にわたる批難に應える形で、『寛容についての第二、第三、第四(未完)の書簡』(原題省略)が次々に書かれた。『キリスト教の合理性』を攻撃するエドワーズ(John Edwards, 1637-1716)に対しては、『弁明』(原題省略)を二度著して応酬した。実体観と神学を巡ってスティリングフリート(Edward Stillingfleet, 1635-1699)との間にも、書簡による論争が続いた。95年以降ロックの晩年は、批判者たちとの論争に終始したといっても過言ではない。

もちろん内外の共鳴者、礼讃者たちも増加していた。例えば、アイルランドの哲学者で、科学者でもあるモリヌクス(William Molyneux, 1656-1698)の賞讃と助言を得たおかげで、ロックは『人間知性論』に加筆し第2版を準備することができた。ちなみに同書は、ロックの生前に四版を重ね、親しく目を通した第5版は1706年に出版された。

しかし彼の著作と思想を広く大陸の国々に浸透させた直接の功労者は、コスト(Pierre Coste, 1668-1747)とバリジ(Ezekiel Burridge, 1661-1707)であろう。コストはオランダに逃れていたフランスの新教徒で、ロックがオランダ亡命中親交を結んだアルミニウス派の神学者ル・クレル(Jean Le Clerc, 1657-1736)の推薦により、イギリスの貴族マッシュム卿(Sir Francis Masham, c. 1646-1723)の息子の家庭教師となった人物である。卿の後妻ダマリス(Lady Damaris Masham, 1658-1708)は、ケンブリッジ・プラトニス

トとして著名な カドワース (Ralph Cudworth, 1617-1688) の娘で、ライプニッツとの交流でも知られる当代の才媛。ロックの恋人でもあった。コストは、マシャム卿夫妻の邸オーツ (Oats) 館に身を寄せるロックと7年間起居を共にし、やがて助手兼秘書として、最もよく彼の人となりと思いを理解する外国人となった。『教育に関する若干の考察』と『キリスト教の合理性』は1695年に、『人間知性論』は1700年に、いずれもコストによりフランス語訳され、アムステルダムで出版された。二つの『弁明』の訳者もまた彼である。

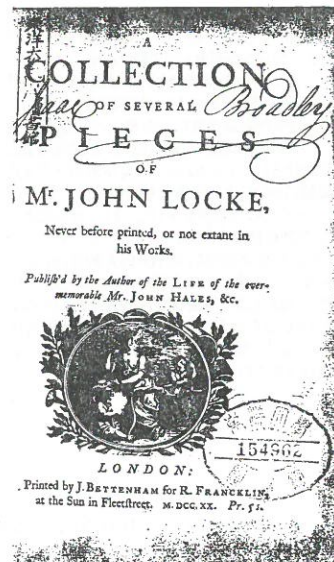
一方パリジは、モリスヌークスの友人でアイルランド人であった。彼のラテン語訳『人間知性論』(1701)により、ロックの哲学思想はあらためてヨーロッパの知識人の机上に届けられたという。

こうして1704年に没した時、ロックはすでに思想界の巨星であった。ニュートンと並んでロックは18世紀思想の確かな水源となっていたのである。友人知己は、遺された膨大な草稿、ノート、日記、書簡のなかから、その一部を編んで、1706年に遺稿集を出版した。世論に應えて、最初の『ジョン・ロック著作集』全三巻がロンドンで刊行されたのは、1714年、ロックの死後10年である。引き続いて第2版が22年に、第3版は27年に刊行された。そして40年に出た第4版の第三巻には、その前年上梓されたアンソニー・コリンズ氏監修、デメゾ氏刊行『ジョン・ロック氏小論集』第2版 (A Collection of Several Pieces of Mr. John Locke. Published by Mr. Desmaizeaux, under the Direction of Anthony Collins, Esq.; The Second Edition, London, R. Franklin, 1739. —この第2版は今日では稀書) が、そのまま加えられている。

本学図書館が所蔵する貴重書は、1720年に出版されたその初版本である。タイトルページ (写真参照) は第2版と多少違って、刊行者名が具体的でなく、<永遠に記憶されるべき人、ジョン・ホールズ氏伝の著者>とだけ記されているが、冒頭のヒュー・ロテスリ (Hugh Wrottesley) に捧げた献辞の署名から、デメゾ (Pierre Desmaizeaux, c. 1673-1745) だと知れる。彼もまたコストと同じフランス人で、友人シャフツベリ伯三世 (The Third Earl of Shaftesbury, 1671-1713. ロック

の庇護者シャフツベリ伯一世の孫。道徳哲学者) と一緒に1699年イギリスに渡り、ロンドンに居住してアジソン (Joseph Addison, 1672-1719) やロックの弟子コリンズ (Anthony Collins, 1676-1729) とともに交わった文筆家である。ヴォルテール (François Marie Arouet, 1694-1778. 筆名 Voltaire) が『哲学書簡』またの名をイギリス便り (Lettres philosophiques ou lettres sur les Anglais, 1734) を書いてロックを激賞する前に、ロックの身边にはコストやデメゾのような信奉者が出入りしていたのである。

デメゾは、ロックの死後、遺言執行人のひとりだったコリンズの指示を仰いで、未刊ないしは著作集に未収録の小論と書簡を選び、本書を刊行した。本文の前に、コストの書いた『ロック氏の人となり』 (The Character of Mr. Locke) なる一文が花を添えている。これはもとコストがロックの死を悼んで、1704年12月10日に『文壇消息』 (Nouvelles de la République des Lettres) 誌の著者へ送った書簡で、翌年2月同誌に掲載されたものである。デメゾは本書を編むに当り、特に依頼してその英訳を転載し、ロックの面影を読者に焼きつけようとした。所収作品は『カロライナ基本憲法』 (The Fundamental Constitutions of Carolina) 他小論4篇と、コリンズら数人に宛てた書簡8種で、小品ながら天才の風韻を後世に伝えるすぐれた論集である。 (次頁へ続く)





本学所蔵本は、元文学部長龍山義亮先生から遺贈された「龍山文庫」中の一冊で、21cm×13cmの茶色革表紙本。京都大学上野文庫、関西学院大学ロック・コレクション、名古屋大学ホップズ・コレクション、一橋大学パート・フランクリン文庫などの所蔵本と並んで、貴重書のひとつである。

(工学部教養課程教授 ひらの・あきら)

『A Collection of Several Pieces of Mr. John Locke; Never before printed, or not extant in his Works』(K 133. 25: LJ: 17)

〔参考文献〕

(主要著作翻訳)

平野 耿訳、『寛容についての書簡』 朝日出版社

大槻春彦訳、『人間知性論』(岩波文庫)

鶴飼信成訳、『市民政府論』(岩波文庫)

宮川 透訳、『統治論』(大槻春彦編、『世界の名著

ロック・ヒューム』収) 中央公論社

服部知文訳、『教育に関する考察』(岩波文庫)

服部知文訳、『キリスト教の合理性・奇跡論』 国文社

田中正司・竹本洋訳、『利子・貨幣論』 東京大学出版会

(参考書)

田中正司・平野耿責任編集、『ジョン・ロック研究』 御

茶の水書房

友岡敏明・中川政樹・丸山敬一著、『ロック市民政府論

入門』 有斐閣

田中正司著、『ジョン・ロック研究』 未来社

ロック Locke, John 1632~1704 イギリスの哲学者・政治哲学者。II シェフツベリー伯の侍医・顧問。伯の政治的陰謀の参画者としての疑いをうけ、1683 オランダに亡命。'88 名譽革命とともに帰国、その理論づりを行なった。彼はデカルト\*の(本有観念)を批判し、観念の経験的起源を説く。本来(心)は白紙であり、すべての対象は経験、厳密には感覚と反省を通して認識されるとした。これはスコラ的実体形而上学を近代認識論へと転化させる重要な契機となり、D.ヒューム\*・カント\*に大きな影響を与えた。また、彼の政治思想は、専制政治、およびそれを支えるロバート・フィルマー\*の(家父長主義)に反対し、近代の個人的自由を基本的人権として擁護し、その立場から国家論を説き、ホッブズ\*の(契約思想)を法(理性の支配する自然法)の支配する立憲政治として、現実の政治の世界に具体化した。◎「人間知性論」1690、「統治論」'90。◎大槻春彦編「ロック・ヒューム」

(コンサイス人名辞典; 外国編 三省堂)

## 図書館 あ・ら・かると

### ★ お知らせ ★

#### 来春卒業される方へ

卒業された後も校友として引き続き本学図書館を利用することができます。

利用の際には、まず卒業証明書(卒業証書は不可)を1通カウンターに提出して下さい。それと引き換えに「図書館利用カード(校友)」をお渡しいたします。なお、証明書は1度提出して下さい。毎年提出する必要はありません。

手続きは、いたって簡単です。

資料を館内で利用することはもちろん、館外への貸出しもいたします。

詳細はカウンターでおたずね下さい。

### ★ あさか かわら版 ★

～リラックスしながらものしりになろう～

2Fブラウジングルームに、「マンガ日本経済入門」をはじめとする、イラスト入り入門書のコーナーができました。経済・簿記・社会のしくみなど休憩がてら気楽にページをめくってみて下さい。

～週のはじめのお楽しみ～

そして新し物好きな方には、カウンター前に展示されている「今週の新着図書」 毎週月曜日に参考図書から一般図書まで一挙に並びます。

#### — 編集後記 —

No.84 (1988 冬)の特集「良い辞書との出会い」では、語学辞書を主体にしたので、今号は、辞書にはこんなものもあるといった色々な辞書をご紹介します。あなたの豊富な知識の“種”は、辞書から……。

TOYO UNIVERSITY LIBRARY INFORMATION BULLETIN **ΚΟΣΜΟΣ**

1989 冬 (No. 88) 1989年12月10日発行 編集: コスモス編集委員会 発行人: 早田芳郎 発行所: 東洋大学附属図書館 〒112 東京都文京区白山5丁目28番20号 Tel. 03 (945) 7314 ©東洋大学附属図書館 1989